

# 白金霞

11月号



平成27年11月発行

第57号

白金葭定例会句会案内

十二月十八日(金) 12:00 ~ 16:00 コビアン兼題: 冬夕焼、すき焼

一月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題: 新年一般

二月十九日(金) 12:00 ~ 16:00 コビアン兼題: 落の臺、バレンタイ  
ンの日

冬夕焼、すき焼の参考句(十二月十八日分)

寒夕焼反り身に魚の焼かれ居り

桂信子

寒夕焼疎林の朧透きて見ゆ

高橋秋月

貨車が行く冬夕焼に突つ込んで

中鉢陽子

缶蹴りの途絶えて久し寒夕焼

後藤九尼克

擦り寄りし犬の鼻先寒落暉

新田美枝子

冬夕焼そして誰もゐなくなつた

結木桃子

明星の銀ひとつぶや寒夕焼

相馬遷子

飛驒牛のすき焼き囲む大家族

吉田暢王

征子寡黙なりすき焼きぢいと煮えつまる

藤木清子

すき焼の煮ゆる間昔語りなど

斉藤杏子

牛鍋を囲み話題は遠き日に

青山千重子

すき焼きの白たきの濤子と分つ

佐川広治

鋤焼の香が頭髮の根に残る

山口誓子

牛鍋や妻子の後のわれ独り

石田波郷

月例会句会報(15/11/20 8名欠2)(西の市、大根)

飯田孝三

異人旅行客ツリストらほうと七五三

大根抜き終えたる畑猫糞ふまる

ひさびさの湯島天神菊づくし

嵩ばれる絵馬の間を七五三

金箔を風が囃せり三の酉

増田陽一

わが歩危し十一月の鉦叩

犬吼えて大根の白林立す

いつの世の桜紅葉か踏む音す

青春の蝶の箱積み冬また冬

猫の手も熊手も頼み三の酉

光成高志

二の酉や枡に金俵俵積み

大熊手見るのは只と言はれたり

足るを知る虚<sup>うろ</sup>引き大根刻みつ

玉葱の植え替<sup>か</sup>へ根切虫憎し

自然薯を掘り上ぐモーゼの杖ならむ

大根を両手に影は手長猿

茹で大根水に浸してある暮し

買主を社長呼ばはり大熊手

二の酉のど真ん中ゆく一升瓶

飛入りの子と。パントマイム小六月

浅草に天麩羅蕎麦を酉の市

網干して大根干して漁師町

暗闇をきて賑はひの酉の市

大根をきざむ厨を城として

裏木戸のこわれしままや青木の实

入院に楽譜携へ小春かな

光  
みち

靴買ひてついでにのぞく酉の市

女声のみに印旛の大根干し

額広きお福並びて酉の市

入院の押韻かしぐ冬燈

筑波嶺に風荒ければ大根干す

紅葉照る山の麓の村歌舞伎

干し大根皺におのれの手を重ね

草もみぢ一筋の道山に向く

歳月やもみじ留むる術<sup>すべ</sup>もなし

吉羽多美子

堆<sup>うずたか</sup>く熊手積みあげ酉の市

秋高し耳澄まし聞く時の鐘

大熊手売れて手締の威勢よく

連れだつて酉の市の人出にお

勝手口泥つき大根届けらる

倉田紀子

武者昭七

浅野正美

青木啓泰



大熊手見るのは只と言はれたり

高志

二の酉や杓に金俵俵積み

〃

蓮田出て手漚で休む畦の上

啓泰

連れだつて酉の市の人出に居

正美

連れだつて酉の市の人出にゐ

大根をきざむ厨を城として

多美子

玉葱の植え替ふ根切虫憎し

高志

大熊手売れて手締の威勢よく

正美

いつの世の桜紅葉か踏む音す

陽一

大吼えて大根の白林立す

〃

茹で大根水に浸してある暮し

みち

茹で大根ともかく水に浸しておく

秋高し耳澄まし聞く時の鐘

正美

異人旅行客ツーリストらほうと七五三

孝三

大根を両手に影の手長猿

みち

大根を両手に影は手長猿

うず高く熊手積みあげ酉の市

正美

堆うづたかく熊手積みあげ酉の市

## 一句鑑賞

光成高志

筑波嶺に風荒ければ大根干す

昭七

筑波山より吹き下ろす風を筑波嵐と言つて冬の季語  
になっている。「風荒ければ」が理に走るきらいがある

が、筑波山と麓の畑の大根干しの風景が想像されて懐かしさに駆られ選んだ。筑波山は連歌の起源になった山で、古事記の日本武尊と御火焼の翁との唱和に「にひばり筑波を過ぎて幾夜か寝つる／かゝなべて夜には九夜日には十日を」を連歌の起源とし、連歌を筑波の道と言う。我が国初の連歌撰集のタイトルが、「菟玖波つくば集」と名付けられ、その後「新撰菟玖波つくば集を経て、俳諧だけ切り離し俳諧連歌抄が編まれ、これが連歌に卑下して大筑波集と呼ばれたのもこういう所以があるからである。連歌や和歌に取り上げられない「大根干す」が俳句的でまた現代的である。

大根の葉のゆさゆさと畑を出る

啓泰

大根引きしてその葉を掴み畑を出る時の描写である。「ゆさゆさ」が大根とその葉のあり様をよく表現している。大根の長さ相当の緑葉が稠密に付いていて、掴むのに丁度よき長さであり、またそこを結んで棒に振り分け干すにも良い。聖護院大根など丸大根を逆に持つとこの句の描写が実感されると思う。そこが俳味だ。

嵩ばれる絵馬の間を七五三

孝三

作者は久々に湯島天神にお参りされたそうだ。その時の囑目詠である。受験絵馬など願いを書いた絵馬が馬の腹の如く嵩張つて掛けられている。その間を七五三の少年少女が通つていく。「やがて受験絵馬を掛けに、また

良縁を得んためとかの絵馬を掛けにくるであらうあな  
た方」と作者の心の呼びかけが「を」に滲む。

### 青春の蝶の箱積み冬また冬

陽一

作者は蝶収集家で版画家であられる。日本は無論外国  
まで蝶採集に行かれてそれを標本箱に並べられ家に保  
管されてある。それらの蝶一つ一つに青春の思い出が詰  
まっているのである。何しろ蝶は美しい。幼虫から蛹に  
なって羽化して蝶になる。人も斯くありたいと思われる  
変化をする昆虫である。私は以前おうちを訪ねて標本箱  
を見せていただいたことがある。それを今の冬に積上げ  
て懐かしんで居られるのだ。昨年の冬もそうだったなと  
いう感慨が「冬また冬」と重ねられた。ここに万感の思  
いがある。悦子夫人との今の境遇を知る我々には惻隱の  
情がどつと胸を打つ。

### 勝手口泥つき大根届けらる

正美

留守の作者に知人が勝手口にそつと大根を置いて行  
ったのである。そういう付き合いをしている近所のお百  
姓さんであろう。私のような素人菜園を営んでいる人か  
もしれない。生活感がよく出ている佳句。啓泰さんの「売  
れすじは泥付大根道の駅」は同じ泥付だけれども囁目詠  
として成り立っている句。泥付大根が取り立てという新  
鮮さを保証しているのだ。

### 一句鑑賞

増田陽一

歲月やもみじ留むる術すべもなし

昭七

年々歳々、木々は紅葉しては散つて冬となる。人なら  
ば老年の華やきであろう。自然は年毎に再生をくり返す  
けれど、人間はそうではない。掲句の「もみじ」には紅  
葉に続く凋落が暗示され「歲月や」の措辞にその深い嘆  
息が現れている。同時に出した拙句「いつの世の桜紅葉  
か踏む音す」も同じく過ぎゆく歲月の嘆きでありました。  
自然薯を掘り上ぐモーゼの杖ならむ

高志

自然の山の芋を途中で折らないように掘るのはとて  
も困難な作業である。掲句ではものの見事に「掘り上げ」  
たのである。これは勿論、鷹羽狩行の有名な「蓮根掘り  
モーゼの杖を掴み出す」の本歌取りというか、パロディ  
であろう。蓮根よりもこちらの方が「モーゼの杖」らし  
いよ、という作者の笑みが見える。更に遡れば「蓮池に  
て骨の如きを掴み出す（西東三鬼）」があつて、名句の連  
鎖反応のようである。

### 二の酉のど真ん中ゆく一升瓶

みち

下五を「樽」とする意見もあつて僕は一升ばかりの樽  
では小さいなと思つたけれど、そんな論議のできるのも  
句会のたのしさである。この酒は祝儀だという。賑わい  
の中を堂々と通つて行く「ど真ん中」が効いている。

## 入院に楽譜携へ小春かな

紀子

何とも明るい入院である。「歌を忘れたカナリヤが入院するような」句ではないか。しかも小春である。こんな句が出来る入院なら楽しい。ちなみに「一句の中にプラスのイメージとマイナスのイメージが程よく配合されているのがよい」と、高野ムツオさんは言う。

## 勝手口泥つき大根届けらる

正美

泥つきの抜いたばかりの新鮮な大根が届いていた。いつものことで、呉れた人は誰だか判っている。近くに家族菜園もある住宅地か、親しみのある近所つきあいが偲ばれる。留守の間に届いていたのなら「届きあり」もいいでしょうね。

## 一句鑑賞

飯田孝三

## 自然薯を掘り上ぐモーゼの杖ならむ

高志

俳人の多くが囃す「蓮根掘りモーゼの杖を掴み出す」(狩行)を踏まえる。モーゼの杖といえば、蓮根じやなく自然薯ではないかというのだ。なるほど、蓮根掘りじやまるで鬼の金棒まがい。く「ならむ」と締め、ユーモラスに和ませるあたり、高志さんの人柄だが、狩行句が知られているだけに、可借<sup>あた</sup>ら、その意が届かぬくらいもある。先蹤との引き合いを仄めかし、言い切った方が、だれでもずっと腑に落ちるのではないか。例えば「自

然薯を掘り上ぐこれやモーゼの杖」、「自然薯掘り出すそ

つくりモーゼの杖」(いづれも乱調ながら)など。別に「二の酉や枅に金俵俵積み」、「二の酉」を詠むのは難しいが、まさしく二の酉である。「金俵」は「黄金の」もあるかと思つたが、通俗に墮する。

## 大熊手売れて手締の威勢よく

正美

大企業は景気上向きだというが、庶民にはその実感が湧かないともつぱらだ。とはいえ酉の市は、大賑わい、来年に懸ける人々の意気込みだろうか。大熊手が又売れ手締めの響き交う、境内の賑わいがまるまる手にとれるようだ。ただ、威勢「よく」は要るまい。例えば、く「氣負ひ立つ」、「氣負ひかな」などはどうだろう。

## 日向ぼこ女もまじる子犬抱き

啓泰

「女もまじる」だから、周りは男だらけ。はからずも半世紀近く前の、ヨーロッパの公園、街角風景を思い出した、大抵、老夫婦が連れだっていた、が、一方、平成の東洋最先進国の日溜りは、爺々ばかり目につく、家にいられないのだ。たまに見かけるご婦人らときたら、きまつて紅をつけて若やぎ、血統保証つきの愛玩犬を抱いてご満悦である。

## 女声のみに印旛の大根干し

紀子

一読、上総は印旛一帯の景色がひらける。大根干しは、昔から冬の主に女の仕事、交し合う話声が聞こえてくる

のだ、高志さんの話では沼周辺は低地で大根がよく育つ。座五の「大」「根」が根菜の生吹を印象づけ、渾身の響きと相まって、筑波嵐が吹き抜けるその地の風土を丸抱えし、ずしんと目の前に据える。偏に、ゝのみ「に」の手柄だ。これが「の」なら、しよせん「女声」は喧騒。他に「額広きお福並びて酉の市」、「お福」は別称「お多福」、「おかめ」。「ヒタヒヒロキオフクナラビテ」と調べも広やか、膨らかめでたい。

## 青春の蝶の箱積み冬また冬

陽一

「青春の蝶」は、若き日の数多の思い出の象徴。国内や東南アジア等、各地で収集された、彩りも鮮やかな数多の蝶が標本箱に整然と釘止めされている。「箱積み」は重ねる歳月に通じ、「冬また冬」も、また、人の世を巡る月日に同じ。陽一さんは蝶博士、悦子さんは療養中のつらい日々にあつて、折々、長年集められた、標本箱にい並ぶ蝶を眺め、お二人で苦楽を共にされた、あの日の日の事々を思い出されるのである。

## 二の西のど真ん中ゆく一升瓶

みち

大熊手の買主が当たり籤を引き当て戴いた祝酒である。手締めうち響く賑わいを分け、一升瓶提げ（いや抱えて、ゆうゆう目の前をお通りだ。互選披露で述べた、一升「樽」ではないかと愚見を引つ込めたい。樽なら当然「一斗」ゝ。「一斗樽」では、通俗、雑駁。句のさわ

り、臨場の諧謔の機微を見過ぐす。「真ん中」の「ん」が臍、見たままの市のだ真ん中だが、かな送りの通則に従つたまでではない。文字どおり字数の真ん中、字形簡明、ゝドマ「ん」と踏んばつて粹。序でに、今年は三の西もある、これまた「二の西」は真ん中。むべ、諧謔は素知らん顔でこぼす。又、イ、才音反復、中尾ンで締め口誦が明快に弾んで、めでたさに輪をかける。来年はもっと良い年になる。

## 草もみぢ道一筋山に向く

昭七

かな綴りの「もみぢ」道が草紅葉が映える野面を一望させる。互選評では、詰屈な感じの中七は、「道一筋」の前か後に「の」が要るなどの意見がでた。ここは、平明にゝ「の一筋の道」ゝだろうか、一面の草紅葉をゆく一本の道が浮き立つ。ただし、掲句は写生の限りではあるまい。前方の山に向つて、きつと大和の山々を思い浮かべるのだ、二上山かも知れない。「道一筋」は辿る人生、互に今や草紅葉つくす野中の道に佇む。してみれば、破調、詰屈な調べは、そこはかのとまどいにも似て、腑に落ちる。昭七さんは、「の」ゝ「の」ゝ挿入を冗漫と嫌うだろう。結「向く」が一句のさわり。

## 勝手口泥つき大根届けらる

正美

「勝手口」に「泥つき大根」は一見つき過ぎのようだが、さにあらず、平穏な身辺を淡々と詠み、些事に感じ



る胸懷を覗かせ、いわゆる台所俳句とは違う俳諧の情趣を滲ませる。

網干して大根干して漁師町

多美子

「網を干し大根を干し漁師町」もあるかも。ともあれ、イ、才音とりわけ子音シをたたみこむ口誦が魅力。

(出句一覽掲載順)

一句鑑賞 (56号分)

増田陽一

理髪屋の廻る看板雁渡る

多美子

街の中に普段見慣れている理髪屋の看板と、たまたま空を渡る雁との巡り合わせが面白い。廻る看板があたかも走馬灯のように、気節の移り変わりを暗示するように動いている。市井の生活と、渡る雁との出会いを寛寺させる句に「雁渡る菓子と煙草を買ひに出て」(草田男)がある。これも不思議な句である。「煙草と酒を」では成立しないだろうし、「菓子と煙草」という変な組み合わせが地上の生活であり、雁は太古より同じ空を通過する。掲句では「廻る看板」の発見が類句のない効果を生んでいる。

鮎落としつぐ山川のこだまかな

幸一

同じ鮎でも、この句では国内の谷川が一斉に鮎を落としている、という大景となっている。全体の鮎の量は如何ほどか、などとは普段思っても見ないことである。山

河が木霊しながら大量の鮎を「落とし継ぐ」という、大  
自然の働きに想いを致させる佳句と思う。

落鮎の川に釣人山に雲

高志

これはまた、あたたかな秋の日差しのように、懐か  
しみのある光景としておおらかに詠まれていて、何処とも  
知らぬ秋晴の川に、屈託のない釣りでも行きたくなるで  
はありませんか。

はたと二駅のり過したう秋思

孝三

はつと気がついたら二駅を乗り過していった。居眠り  
ではありがちなことだけれど、ここは俳人の矜持として  
「秋思」の情感に浸って居たのである。と。「はたと二  
駅」という、巧みな出だしの音律によってこの句が決ま  
っている。

ひもすがら風吹きすさび鮎落つる

みち

秋になつて野分の吹きすさぶ頃、年魚とも言われる鮎  
は命を終えて海に流される。併し鮎にとつては途中で産  
卵の大役を果たしたので満足であらう。掲句は秋も長け  
ゆく蕭条たる景色を鮎落ちる川の流れのように淀みな  
く詠んでいる。

砂山に影を落して秋の蝶

昭七

砂山を背景に蝶の影が実にくつきりと見えるよう  
である。そしてこれは「秋の」蝶ではなくてはならない空  
気の澄み切った気配がする。何蝶か？単純に秋型のキチ

ヨウが似合うかと思う。連想するのは、中原中也の「小石ばかりの川原があつて・・そこに一匹の蝶が止まり、淡い、それでいてくつきりした影をなげているのでした」という一節である。そして掲句の蝶の影は中也よりももっとくつきりしている。

### 銀河までトロツコが出る河童沼

啓泰

宮沢賢治ふうの童話的幻想とも取れるけれど、雁も渡る江戸崎あたりにはこんな沼もありそうである。何か工事中のトロツコを敷いた沼であり、銀河まで、と言うトロツコを夜景に見た印象が面白い。賢治でも幻想と見えるものが多くは身近に実在する自然の詩的変形であつたようだ。そのために無理のない詩の空間が生れる。「河童沼」も実在するのも知れない。

### 旅心落鮎の頃定まるや

正美

旅心定まるとは何か。芭蕉が漸く白河の関まで来た時の心理状態である。とすればこれは旅の途中であらうか。秋深くまで来ると、もつと落ち着いた旅ができるか、と。「落鮎の頃」に、旅心の情緒が深い。

### 茹菱を紙袋で売る昭和かな

紀子

菱の実を茹で、鋭い刺に注意しながら剥くと、栗に似たほくほくした身が現れる。野趣のあるおやつであつたらう。「紙袋」が効いている。もはや子供もそんな鄙びた食べ物知らない。如何にも「昭和かな」である。武

田泰淳のロマン「森と湖のまつり」の北海道塘路湖アイヌ部落での「菱の実まつり」の場面が印象深い。僻地の重要な食糧であつたらしい。

### ハガキ句（56報）管見

飯田孝三

### 着水の川鵜すぐ消ゆ終戦日

敏子

川鵜が着水と思いきや、視野から消える。水に突っ込んだのだ。結句「終戦日」が切ない。特攻機の散華を臉に重ねたのだらう。散華の一瞬がロス・モオションで目に迫る。散つたのは二十歳代前半の若者たちばかりだ。哀惜の念は、年々、深まるばかりである。

「すぐ消ゆ」がいのち。u音三重の音律は内に響き、姿はすぐ消えて思いはいつまでも沈む。

### 桃吸ふて五欲のひとつ満たさるる

璃子

「吸ふ」が大切。要である。「食ふて」、「食みて」では異句。「吸ふ」は、「乳を吸ふ」、「息を吸ふ」などひたすらで、切々のいとなみ。「食ふ」また「食む」も切実の行いだ、他方、日常茶飯。切迫の気は乏しい。「酒やめてどの本能と遊ぼうか」は、磊落、細心、なお童心を失わぬ、老俳壇ボスの快作だが、悠々、いささか自嘲風の諧謔にふつと哀愁が漂う。

閑話休題。五欲（仏）は人間の色・声・香・味・触に執着する欲情。その一つが満たされたという。余は言わ

ず。心情は受動、肯定的に詠つて、切々、かつ慎重深い。敢えて音便させぬ「吸ふて」と「満たさるる」の交響の機微に感ずべし。作者は、言葉の「意味」、「ひびき」、「照り翳り」、「字形」の微妙に通じた言葉の遣い手である。

ハガキ句 56 報 (10 / 8 / 16)

火蛾舞ふや能の土蜘蛛闇に散り  
スカアイツリーゆらぐ水隈水馬  
桃吸ふて五欲のひとつ満たさるる

八月十五日蓮見舟八句

終戦日喪章のごとく鵜の寄れる  
相乗りて俳縁結ぶ蓮見舟  
遠蜩湖畔は芦の吹かれをり  
狼煙めく白鷺の翅笠にさし  
着水の川鵜すぐ消ゆ終戦日  
奥手賀や早稲の色付く舟着場  
エンジンと波切り音の盆の舟  
さるすべり見晴らしの良き句会場

羊三  
孝三  
璃子

陽一  
めぐみ

悦子

三穂

敏子

白木

高志

トシ子

終戦日喪章のごとく鵜の寄れる

陽一

鵜が喪章のように相寄るといふ。喪章は旗竿に垂れる標だろうか。旗は国旗。「終戦日喪章のごとく」の字面を見ていると、不思議、日章旗が彷彿する。「鵜」は頭垂れる国民の姿に通じるか、終戦の日の記憶をもつ人は減ってしまった。

エンジンと波切り音の盆の舟

高志

「盆」は御盆、つまり盂蘭盆。「舟」は八月十五日、恒例、手賀沼蓮見の舟である。その日は終戦日。舟上、戦没者を悼むところや切。静かな湖面にエンジンの音と舳先の水切り音だけが響く。不図、戦没学生の手記にあった、特攻隊員の遺句を思い出した。「エンジンの唸り淋しや糸つつじ」。出撃前の一刻、機の傍らでエンジンの音に震える糸つつじをじっと見つめる、若者の眼ざしが見えてくる、余談。ご免なさい。掲句で一つ気懸なのは、「エンジンと波切り音の」の語法。「エンジン（の）音」と言いたい、さて「波切り」以下は？

遠蜩湖畔の芦は吹かれをり

悦子

情景の説明は要らない。「遠蜩湖畔は芦の吹かれをり」もあるだろう。景が広がる。

奥手賀や早稲の色付く舟着場

白木

これまた、情景説明は要らない。ただ、「船着場」が場所限定風である。「奥手賀や早稲田色づく舟着場」ある

いは「奥手賀や早稲の色づく舟繫」もあるだろう。周辺を取り込むのではないか。「や」が活きる。

さるすべり見晴らしの良き句会場

トシ子

当日の句会場、旧加納治五郎別邸は屋根越しに手賀沼を見晴らす。庭には、年々、百日紅の老木が花をつける。

火蛾舞ふや能の土蜘蛛闇に散り

羊三

能舞台の囁目。演目は「土蜘蛛」。薪能だろう。

狼煙めく白鷺の翅笠にさし

三穂

「狼煙めく白鷺の翅」がピンとこない。実地に見なかった恨みが残る。

相乗りて俳縁結ぶ蓮見舟

めぐみ

蓮見舟に相会い、同好の縁の深さを改めて実感する。俳句仲間ならではの誼の有り難さは、俳徒己がじし、日頃身に入みるところだが、今更、それを諾うばかりである。

〈俳句通信〉

芭蕉の「かるみ」とその以後について考察されるとのこと。小生も勉強したいので、脱稿されたら、早速、読ませてください。小生、かねて彼の人物と俳諧、いわば「俗」と「聖」について調べ、考えてみたい、また、蕉門の俳諧作品をもっと読んでみたいと思ひながら、つつい、先き延べしてきたところ、思わぬ眼の失調で、それどころではなくなった。何とも、腑甲斐なき次第です。

まあ、気長に回復を待ちます。蕉門といえは、「細道」同行にあぶれた、路通の句がいい。芭蕉が彼をかついてたのが分かります。暇ができたなら、一読をおすすめします。岩波文庫の（確か）『蕉門の俳諧』に収録されている筈です。

最近、俳句は口唱性が大切と、殊更、感じています。最近の新聞紙上で、有名な「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」（芝 不器男）を目にしました。虚子の名鑑賞で知られるところですが、名句案内風の記事の筆者（俳人 高田正子）は「K音の入らない「あなた」は、より体の奥に響くようで、望郷せつせつたる思いがせまってくる。」と述べている。ぼくは、その前に、十七音中十一、a音であることを言いたい。それも頭から八音連続だ。異例中の異例である。また、N音多出の調べにあつて、K音が「葛」をまざと目に見せ、「かな」が利く。望郷茫々。ただ、単なる望郷ではないだろう。a音は胸の奥から思わず発する声だと思う。現代詩はどうに音律を放棄し、短歌も、戦後、目で読み頭で知る文芸になつてしまった。この頃は、話し言葉の語呂合わせ風でさえある。敬愛する河野裕子さんも鬼籍に入ってしまった。俳句は、短詩ゆえ、殊更、音律が必須、大切だと思う。いわば、生体の体内律の自ずからの発露である。だから、やはり俳句は思わず口を衝いたものがいい。

ひろし先生から、早速、先の駄文に対する、大変、丁寧なお礼のハガキを頂戴し、恐縮しております。(先生の内諾はいただいておりますが) 拡大コピーを添送します(ハガキでは上部の写真はカラー)。高志さんには、今まで、作品、人物ともに優れた、多くの仲間を紹介いただいて、とても嬉しく、有り難く思っています。なにかれと啓蒙され、諸氏との交歓は俳句へのこの上ない励みとなっています。お礼申しあげます。

お陰さまで、眼は徐々に回復していますが、元に戻るには、半年から一年ぐらいかかるようです。初め、卓上の食器類がダブって見えました、それはなくなり、屋内の生活にはさして苦勞しなくなりました。複視の現象範圍が狭まっていますが、読み書きなどは行が錯綜、字が重なり、どうもいけません(片目でします)。外出は、不案内な遠方は別、週二回、日暮里の整形外科へ通うほか、月一、二回、都内に通院しています。他に異常なく、食欲旺盛に過ごしています。暑さ収まり、折あれば、どこかで歓談したいと思っています。草々

#### 《駄句近作》

向日葵咲くどの向日葵もゴッホの色

口開いて口開いて隅田川花火

「新編武蔵風土記稿」の家真葛咲く(平 22・09・03)

#### お便り広場(到着順、敬称略)

白金霞 56号拝受致しました。美清流さんの思い出の記よかったですね。今も多士済々ですが、八丁堀句会もさうでした。その中の一員であったことは幸せでした。亡くなった水野哲夫さんもOB会でお会いするといつもその話でした。みち様から領収書を頂きましたが必要ありません。すこしでもラクをして下さい。くれぐれも御身体を御大切にして下さい。(10・25 小出也)

白金霞 十月号ありがとう。楽しく読んでいます。同封のお便りも嬉しく拝見致しました。敏子さんありがとう。体調もだんだんよくなっているとのことではつと安堵というところです。こちらからはあまり楽しいニュースもありませんので。私の常日頃考えながら暮らしていること少し書きます。田んぼの刈り取りも終り柿の実が赤く色づいた淡いピンク濃いピンクそして白色のコスモスの花がやさしく揺れている。毎日のウォーキングの途中目に入る風景である。そこで一句出れば良いのだがなかなか良い言葉が出てこない。時の流れと共に時代の変化で休耕田がふえて雑草の中に見える心安らぐ田舎の長閑な風景です。私の体調も良い方だと思えます。一週間(水)はゴルフ練習日(日)。(公式戦35名の会)それに月一回有磨学区同好会の大会があります。楽しんで

やっていますので割りと欠席もせずに行っています。膝に少し痛みがあるので少し休みながら行こうと考えています。今日はこれくらいでやめます。お互いに高齢になりました。体をいといながら残された人生明るく楽しく生きてゆきましようね。二人の健康を祈りながら終わりにします。

平成27年10月28日自宅にて 健三より 高志敏子様

御葉書戴きました。本当に楽しい一刻でした。全くお元気のようによかったですね。きつと長生きできますよ。長屋さんはかつて山尾さんのグループが亀戸散策の折、私が行く喫茶店を紹介、そこで軽食をとりました。未だにマスターは所沢の人と云って話題になります。呉々も御身体を御大切にして下さい。立派な記念誌になりますね。(11・1 小山陽也)

御葉書戴きました。みち様全くの御元気でよかったですね。大切にしてあげて下さい。連句作りをしてよかったですね。もつとも私のは川柳で申し訳ありません。今年から来年五月まで八千円づゝ送ります。不足分はまた御連絡下さい。呉々も御身体を御大切にまた御世話になります。(11・3 小山陽也)

秋は毎日少しづゝ冬へ向って進んでいるようで昨日と今日の違いをいろいろところで感じているように思っています。過日の「集い」まことに楽しく、久々で上野の

空気、皆様との同じ道を遊ぶ仲間意識、常とは違うご馳走、初めての連句、小山様光成様の細やかなご配慮で六時には帰宅いたしました。みち様とはご病後にもかかわらずさわやかなご様子で、安心いたしました。殿様方の中でとりとめもないお話でしたが、大変すてきな時を持ち嬉しく御礼申しあげます。「ぎんなん」もお手をおかけられたお品嬉しくありがとうございます。どこ云って説明できない不思議な味でキライという人に会ったことがあります。早速御礼をと思いましたが翌日姪が来て一日どっかり居座り、食べさせることと、おしやべりに終始何もできずやつとペンを持つことができご無礼申しあげました。

さて、梅の花の席上でしたか、私の手許の古ぼけた本、お引き受け下さるとのことでしたので、失礼とは存じますがお送り申しあげます。昭和二十年代の復刻版かと思いますが三十年前に出たもので、本棚の隅で可哀想な姿になっておりました。光成様の周到な出版計画に驚いております。本を世に出すのはまことに大変でこれからまだぐゝ苦勞とお察し申しあげます。一と言御礼と思いつゝとりとめもなくお許し下さいませ。風一号は既に吹きました。がこれからの季節お二方々様のご隆盛ご健吟を心より願っております。ごきげんよう。かみなつき終りの日

長屋璃子

光成高志様  
光 みち様

立冬を前に冬暖の日が続き昨日は一の酉でした。モタ  
くしている中に今年も終りそうで、どうしたものかと  
考えてしまいます。過日は古本お受けとり下さいまして  
ありがとうございました。その上美しい「ヒザカケ」を  
頂き、食べこぼしの名人を見抜かれてのことゝぞ存じ、  
大切に持ち歩き、ここぞと申す時に使わせて頂きます。  
ヨタク婆さんを今後ともよろしくお願い申しあげます。  
お礼まで、ご自愛下さいませ。

(裏面) 樋口一葉 羽石光志画 (11・4 長屋璃子)

(ヒザカケのつもりではなく、ハンカチとしてさし上げました。  
白いのでよこれたら直ぐ洗濯をされたらよろしいでしょうと憚  
りながら申しあげますとみちが申しております。)

前略十一月の句会楽しみにしていましたが、十七日  
(火) から二〇日(金) まで親戚一同で富山に集まる事  
になり(毎年一回の交歓会です) ましたので残念ながら欠  
席させて頂きます。駄句ですが同封しましたのでよろし  
くお願い申しあげます。十二月を楽しみにしております。  
草々 (十一月五日 武者昭七)

早々と先日の吟行会の句報有難うございました。誓子  
生誕の翌日のこちよいおでんとうさまにもめぐまれ  
て、また「みちさま」のお元気なお顔にも接し、心もは

ればれと致しました。貴兄のように小生にはものは書け  
ませんので、せめてく実作で交友をあたゝめる他には  
とりえはありませんが、これからも参加させて頂きます。  
それから五周年記念の原稿は散逸しているので、貴兄の  
方でよしなにお願ひ申しあげます。草々

(裏面) ふぶく中ゴンドラは定められた路 静塔

(11・16 佐藤宏之助)

会費二千元+同封致します。古代は別便です。毎朝  
落葉を燃やしています。あとはのんびりの毎日です。  
益々のご活躍を祈ります。呉々も御身体を御大切に  
下さい。(11・16 小山陽也)

しもつき半ば、落葉激しくなつて参りました。先日の  
「歌仙」お手すき和紙によくぞうまくのりましたのにオ  
ドロキです。我ながら見れば見るほどおはずかしい物を  
残したと呆れております。向寒の折、お二方様のご活躍  
のあまりお風邪でもめしませんようにと願うのみでござ  
います。11月東京クラブ会報ご笑覧下さいませ。

(11・18 長屋璃子)

前略 新漢和辞典、歳時記、ありがたく受取りました。  
本屋へはよく行きますがなかなか手が出ません。死ぬま  
でいろいろ勉強しようと思います。敏子さん元氣にな  
って良かったね。体に氣をつけて頑張ってください。万  
年筆カートリッジがみてた(11・18 植田健二)

先日はお世話になりました。大変楽しい例会でした。遅れ馳せご免、駄文「鑑賞」をお届けします。実はプリント前の仕上稿をうっかり全文消してしまい、やり直しました。私事の駄文をご覧ください、ご一任いたします。向寒の砌、ご夫妻共々なにとぞご自愛ご健吟を。

(平 27・11・24 飯田孝

三)

## 受贈誌 (H27年11月号)

郁子熟るる皮下出血の膨れきて(彩125号) 平野ひろし  
年暮るる句友句敵みな失せて (〃) 〃

薔薇百花ドアノブ高きイギリス館 (〃) 清野かつ江

孵化したる蜂の子すでに蜂の貌 (〃) 木村貞恵

一発で獵期始まる猪の山 (飛行雲76号) 駿河岳水

布団干す山岳警備隊詰所 (〃) 〃

水引きの穂の咲き初むもかく細く(あすか十一月号) 山尾かづひろ

お茶運ぶ少女の笑顔菊の花(東京クラブ11月) 輝子

しらしらに桜落葉の芳しき (〃) 璃子

落日の富士真向かひに神無月 (〃) 理佳江

小春日や湯気をくゆらす堆肥山 (〃) 晴夫

冬の蜂留守の禅寺の茅屋根へ (〃) 万世遊

## こだま

・山尾かづひろさんのブログ俳枕 253 に次項の連句が紹介された。

## 排窓評論

ハガキ句44報の後半に「上野梅の花にて雛の膳」のま  
えがきの左に5句並んでいる。その人たちと俳句談義  
をせむと陽也さんのご提案にて六年ぶりに同席、ランチ  
膳を戴いた。今回は、みちさんが加わった。席上高志の  
発案にて連句を巻こうと即興で句をつけ回した。みちさ  
んの「和牛もいただき」のところで隣の風月堂二階に  
移り、十八句で日暮れ近くなつたので別れた。半歌仙と  
なつたが、ハガキ句報68報に取り込み、五周年記念号に  
掲載した。茶を飲みながらの懇談と色紙が回って来たら  
ば、前句を読んで、連想を働かせ句をつける。どんな  
つけてまわしていけば話と句とが渾然としてうたの世  
界と現実の世界に遊べると思った。又機会があれば、歌  
仙を巻きたい。そして、芭蕉の時代にあやかりたい。元  
禄時代の文化興隆期にあやかりたいと思う。(下の破調の  
句は、陽也さんの梅の花の籤に当って只で戴いたランチを言った  
もの。水のむが爆笑を誘って愉快な瞬間であった。)

白金葎 はつきんかの白穂の靡く秋高し

高



17

靈魂の形代だからそれに告げよというのは、もう一度娘の靈よここに戻っておいで、ということである。生前果たすこと出来なかった娘の願いに応えたいと男は思ったのか。実はこのうた、「後撰和歌集」秋の上の巻に在原業平作として収められているという。もともとは夏から秋への季節の移ろいという単純なうただった。物語の語り手はそれを見事に美しくも哀れ深い恋物語に変身させてみせたのである。ひとと自然とがやさしく交感し合っていた時代である。

## 姉のこと

飯田孝三

私ごとで恐縮だが、僕には姉が一人いた。名は文子といい、齢が一周り違った。生きていれば九十五才になるのだが、十五年前に他界した。昼前、庭先の生垣の刈り込みをしていて、気分がわるくなり、午後、様子が急変、家族が救急の手を尽くした甲斐もなく逝ってしまった。日頃、医者にかかることもなく、元氣だと聞いていたが、なんと、薬一粒口にする暇なく、あっけなく亡くなった。九月に入って間もない暑い日であった。診断は急性心不全、享年八十一才。当時でも、天寿を全うしたとはいえない。亡くなる一夜前の晩、不思議に、姉が横になって苦しそうにしている夢をみた。姉は子がなく、実家（つまり僕の実家）から生れて間もない姪を迎え入れ育てた。

僕が就職後何年か、姉夫婦の許に寄寓していた頃のことである。幼い頃、時にはきびしかったが、齢が離れていたこともあって、日頃の姉との記憶は殆どない。が、戦中、一時、村の小学校（当時国民学校）の俄教師（注）をしていた姉の校庭での姿が目にある。僕はまだその生徒だった。

姉が亡くなる少し前に会ったとき、最寄のカルチャー教室で俳句を始めたと聞き、作品を訊ねると、見せるほどのものはないと笑って、代わりに次の句を告げた。昔、叔父の家で作られた句だという。

葉の朽ちて実の二つ三つ草の蔓

昭和十年代のちようど中頃、たまたま、叔父のところへ、ホトトギス門同好の持ち回り句会に侍らされ、季節「草の実」で詠んだとのことだった。二十歳の初心にしては上手<sup>うまい</sup>と思った。兼題詠だったろう。その年の始め父を亡くしている。

手先仕事器用なれども夕端居

姉の一周忌の法会の終りに、姪から見せて貰った、カルチャー教室の句会報に載っていた最晩年の句である。十何年か前に連れ合いを亡くし、一緒に住む姪家族も二人の子供が中学生になり、とうに膝に寄りつくことも世話やけることもなくなつて、無聊の日々を重ねていたのだらう。東京で隣の区に住む僕も、仕事や日常の用に紛

れ、互に訪ね合うことも稀になっていた。晩年の姉の心情が見てとれ、若い頃、実家でよくお針や編み物をしていた姿が思い出される。

紅をつけらるる残暑の棺の中 孝三

前年、姉を見送った一句である。いつの間にか十五年が過ぎてしまった。(平 27・09・20)

(注) 男性教員の応召後の補充に適任の未婚子女の起用が全国的に行われた。

詩 (56号訂正して再録)

ぼくと彼 山岡草太

ぼくは走る 大雨の日に  
もっているかさが 意味なくくらいに  
ひみつの場所へ向って  
そこには なぜか  
ぬれていない 彼がいた  
彼に どうしてぬれていないの  
とたずねた 彼は  
ふふと 笑うだけだった

我孫子日記

10/20	例会
10/21	巢鴨
*	
10/30	六本木
*2	
10/31	バード
*3	フェスチ
11/4	吟行句会
*4	
11/6	本厚木
*5	
11/17	二の西
*6	
11/20	例会

\* 谷崎の墓の隣の式部の実

墓石の高さまちまち秋の蝶

\*2 日展や波の祐一と言ふべけれ

\*3 コスモスの畦に立ち咲く鳥祭

\*4 菊に向ひ午下の日輪衰へず

智恵子思ふレモンのありし高村家

グーグルで確定車輪梅の実を

馬肥えて水掛地蔵水に痩せ

秋天の雲なき四迷墓なりし

龍之介の墓に萎れし秋薔薇

群青の空に山茶花喜雨亭墓

\*5 行く秋や無言劇とてこれいいね

\*6 カタカナの買手増えたり大熊手

西の市火打石打ち祓はるる

熊手の柄火の用心の札貼らる

高志

高志

高志

宏之助

敦子

高志

みち

興正

半寿

静秋

高志

みち

高志

みち

〃

## 編集後記

飯田孝三さんのエッセイをいただきました。今月号に掲載しました。お蔭で二〇頁になりました。本誌をお送りする方々からいつも便りをいただきます。お会いした時しっかりお礼を申しあげ<sup>いとま</sup>る暇がありませんので、ここで、しっかり感謝の意を表します。原稿がなくては俳誌は発行出来ません。本誌はこれも幸いなことに文士の方が多く参集されておられます。寄稿されたエッセイ（随筆）を俳句と共に収録して五周年記念合同句集の発行を目指して編集作業に取り掛かっております。今回で57号、十二月が58号、来年二月で60号となります。月々の作句選句編集の作業の中で合同句集の編集を行います。どうか今までの白金葎の自句をもう一度ご覧になり、自選句を抽出ください。

兼題句を毎回二句出句するようにしてまいりましたので、兼題になった季語について、それにふさわしい句、季語の本意<sup>ほんい</sup>に添ったいい句を選んでお示しください。確か平井照敏さんの歳時記に季語の本意に近い句に＊印が付されておりましたが、その趣旨で選句願います。時間があまりありませんが、瞬間選句でも的外れにならないと思います。以上のお願いは別紙にメモしてお願いするつもりですが、ここに書いておきました。エッセ

イが多くあります。また、白金葎創刊の核となったハガキ句も出来るだけ掲載しますので、合同句集とは言え、「俳句とエッセイ」という副題になります。

私は今「芭蕉の軽み以後」を書いていて、延宝八年までの句を見てきましたが、天和に入って芭蕉三八歳から四十歳までのたった二年あまりの句風の大変化に驚いております。軽みに至るまでの旅の生活は即芸術になっています。芭蕉の心をわがものとできるようまだまだ句を読んでいこうと思っています。

今年も一カ月あまり、どこかで良いお年をとっているか、と聞いていた覚えがありますが、それは師走の十八日までお預けにします。

白金葎 第57号 平成27年11月発行  
編集・発行人 光成高志 (Tel & Fax 04・7187・1068)  
発行所 〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17  
表紙の題字…加納綾女 写真11月27日の白金葎